

# 1994～1996年春季の常磐沖合海域におけるスルメイカ幼体の分布

## (要旨)

### Distribution of Japanese Common Squid (*Todarodes pacificus*) Larvae in the Offshore Area of Joban during the Spring in 1994 - 1996

森 賢・中村好和

Ken Mori and Yoshikazu Nakamura

北海道区水産研究所

#### はじめに

東北・北海道太平洋海域に来遊するスルメイカは東シナ海から本邦南西海域で冬季に発生した群が主体であり、孵化した稚仔は黒潮に輸送され、成長しながら北方の冷水域に移動していくと考えられている。スルメイカの各成長段階において、リンコトウチオン幼生や成体については調査が積極的に行われており、その生態学的知見が集められてきている。しかし、幼生から成体に移行するまでの幼体期の生態については未解明な部分が多く残されている。本報告は常磐沖合域でスルメイカ幼体を対象とした調査の結果を示す。

#### 調査方法

調査は1994～1996年までの3年間、各年4月中旬～下旬にかけて行った。調査海域は北緯35～38度、東経141～146度で囲まれる海域に設定した。イカ類幼体の採集には口径2mのリングネット(円筒円錐型、目合3mm)を用い、表層曳き(3ノット、15分間)および斜め曳き(3ノット、最大水深100mで調節)を行った。調査は夜間に行った。

#### 結果と考察

採集されたイカ類幼体ではホタルイカモドキ科、テカリイカ科の幼体の採集尾数が各年とも多く、これらに次いでスルメイカが多く採集された。曳網方法別に比較すると、スルメイカでは斜め曳きよりも表層曳きの方が1曳網あたりの採集尾数が多かった。1曳網あたりの採集尾数は0～66尾の範囲を示し、多くの調査点では5尾以下にとどまっていた。採集されたスルメイカは各年とも外套長10mm前後の個体が多く、範囲は5～35mmであった。スルメイカの採集が多かった調査点は表面水温が13～15°C、100m深水温が10～13°Cで示される海域が多く、比較的狭い水温帯にスルメイカ幼体の分布が集中していた。また水温の鉛直分布等からの比較から、スルメイカ幼体が黒潮続流からの北上暖水のフロント周辺部に集中する傾向が認められた。春季の常磐沖合域は黒潮や親潮の影響を強く受け、経年変動が大きい。このような生息域の環境変動がスルメイカ幼体の分布、そしてその後の北上回遊に強い影響を及ぼしていることが示唆された。